

# 『パイドロス』におけるイソクラテスの現存から考える、 エロースの発現の基礎としての美的説得の問題

一色 裕

論題における「美的説得」とは、美しい言論を用いて言葉巧みに相手を誘導すること一般、すなわち、リュシ阿斯演説にみる詐欺の試みから、プラトン本来の言語による哲学探求までの振幅を含意する言葉である。peithein の語自体が説得と誘惑の両方の意味をもち、説得にエロースの要素が含まれることを示唆している。美的説得の技はレートリケーと呼ばれるのがふつうかもしれないが、通俗弁論術をこえるプラトン固有の弁論術の定立は、それ自体が論証されるべき課題であるので、レートリケーという言葉を使わずに美的説得と表記したい。美的説得はロゴスと美の関係が問われる概念なので、本発表ではロゴスと美とエロースの関係が検討される。まず、この問題に対するプラトンの接近の仕方（第1節）と、かれの美的説得の技の考え方（第2節）を確認したうえで、『パイドロス』結論部における美的説得とエロースの関係に光をあて、パリノーディーアにおけるエロースを素材とする通常の扱いとは別様に論じることとする（第3節）。Corpus Platonicum における唯一の実質的言及がみられるイソクラテスの存在（*Phdr.* 278e8）が、プラトンによる問題の取り扱い方の全体に影を落としている可能性について、あわせて問題提起したい。

## 1. 『パイドロス』に先立つ対話篇における美とロゴスとエロースの問題

美とロゴスとエロースの関係について、『パイドロス』に先駆けてプラトンが考えてきた内容を、『イオン』と『饗宴』について概括することから始めたい。

『イオン』は『ソクラテスの弁明』の詩人批判の論点を集中的に取り扱う対話篇で、芸術の教育的機能に照明が当てられる。芸術の機能は教育が凡てではないが、詩人が自分のものした作品に実現している善美の価値を自ら説明できないことを批判するプラトンには、作り手も受け手も陶然と魅了されることへの嫌悪がある。ロゴスをもたない<sup>1</sup>感性的価値それ自体を評価することの拒否の論理を解明するのが、『イオン』の課題である。ロゴスとは一応、言語（verbum）に明かされ理性（ratio）的に把握される内容と定義しておく。

<sup>1</sup> Dodds (1959) 322.

イオンがホメロスについて全知を主張するのは、個別の領域の全体にわたって漂う適合の美を、自らの術知の眼目としていたからである。「イオン：少なくとも、私の思うところでは、吟唱術は、男にとって何を語るのがふさわしいか、また女にとってはどんなことが、奴隷にとってはどんなことが、自由人にとってはどんなことが、また支配されるものにとってはどんなことが、支配するものにとってはどんなことがふさわしいか、それを識別するのです。<sup>2</sup>」(Ion 540b3-5) ホメロスについて「自分の物語れないものは何もない」と豪語する(536e3) イオンは、自らの術を棟梁的な技と考えているが(540e7-9)、ソクラテスが適合性として理解される美(kalon)を正確性(orthon)へ変換する<sup>3</sup>と、イオンは行き詰まる。「ソクラテス：そうすると君はこういうことを意味しているのかね。つまり、海で嵐にあった舟を管理する(文字通りには「支配する」)人にとって語るにふさわしいような事柄を識別するのは、舟を預かる人よりも、吟唱詩人の方がより見事だろうとね? イオン：いいえ、少なくともそういうことなら、舵を預かる人の方です。」(540b6-8) ホメロスの詩に実現している美の内容を説明できないイオンは、プラトンの解釈によれば、忘我のままに美を体験している。人間を超える<sup>4</sup>、すなわち、theios であって tekhnikos でない<sup>5</sup>のがイオンである。プラトンは吟唱術(rapsōidikē)のような、technē であることを含意しつつも実質において atekhnos な営みを認めないので<sup>6</sup>、ロゴスをもつ美とはなにか、どうしたらそれを術によって実現できるかが課題となるが、『イオン』ではなにも語られない。

徳の定義探求を扱う初期では目標としつつも届かなかったテーマが、美である。『饗宴』では、忘我および哲学的分析とは異なる美への近接法が議論される。(美の定義を扱う『ヒippias (大)』は論法の点では興味深いものの、作品構成・語法・定義対象の性格の観点から偽作と判断せざるをえない<sup>7</sup>。) 美は分有がもっともうまく機能するアイデアであり、『饗宴』と『パイドロス』では、美のこの特性を利用して、よき生の形成を論じている趣がある。問題意識においては接続する両対話篇であるが、美のアイデアの認識の結果を「真実の徳の出産」と表現して終わる『饗宴』は、美のアイデアを判断の根拠として扱う『パイドン』に後続し、アイデアの認識にもとづく哲人政治を組織的に論ずる『国家』の前に位置する作品とおもわれる。

<sup>2</sup> 岩波版『プラトン全集』第10巻(1975年)所収の森進一訳に基本的に従う。

<sup>3</sup> orthōs 537c1, 538c4. 誤解のないところでは、ソクラテスは kalōs の語も使う。Cf. 538a7, c5, d5. orthon は規則への合致を意味するので、適合の美を分析するためには有効な変換である。

<sup>4</sup> Dover (1993) 322.

<sup>5</sup> Camp et Canart (1956) 46-47.

<sup>6</sup> ソクラテスの口に入れられた形で rhapsōidikē への言及が作品中に8回あり、これ自体は論駁されていないことに注目し、カントの考えを援用しつつ、詩の形を整えることと、それを美しく仕上げることは、異なる契機によって説明されるべきだと考える Janaway は、正確に語ることの説明を術知に、美しく語ることの説明は靈感に求め、真の説明と美の説明を区別する。しかし、これでは、プラトンの嫌うロゴスを持たない美の説明になってしまうので、解釈として取ることができない。Cf. Janaway (1992) 19-22.

<sup>7</sup> Isshiki (2003) no pagination.

『饗宴』はソクラテスの現存にもとづくソクラテス讃美がテーマであり、『ソクラテスの弁明』の美的ヴァージョンである。冒頭の報告（ディエーゲーシス）の連鎖とアルキビアデスのソクラテス讃美の間に、ディオティマの語りを頂点とする弁論の饗宴が置かれる文学的構成がとられる。ディオティマの語るエロースの陰として、アルキビアデスの挫折したソクラテスへの愛が語られ、光と影の交錯の中にソクラテスの姿を浮かび上がらせている。ディオティマは、小秘儀において、美が身体的特性を有することを、愛・出産・ジェンダーなどの問題群によって説明し、さらに、奥義では、よき生の実現に必要な「美とはなにか」の問に答えるべき内容を、美に対する欲求であるエロースの上昇運動の解明によって、ソクラテスに語る。美は演繹とも帰納とも異なる発見によって求めるほかない、哲学的推論より広義の修辞学的モデルに親和的な推論の対象である<sup>8</sup>。ただ、これらの教説のすべてが、プログラム規定の開示にとどまっていた、対話篇の議論の実質的内容に影響していない。ディオティマの語りはソクラテスを圧倒するものの、語る内容については、説得の効果を生むに終わっているため、『パイドロス』のパリノーディアアの段階にある。ロゴスを得た美の解明を目標とするプラトンにとっては、まだ道半ばにとどまる。

『饗宴』の問題提起を受け、美とエロースの問題へ知識論的な接近を試みるのが『パイドロス』のスタンスである。知識論的接近を可能にするのはロゴスの論点であり、ロゴスを得た美の獲得と発現の問題が論じられる。この対話篇の最初の問<sup>9</sup>である「(エロースについて) kalōs なロゴスの行使（書くことと語ること）は如何にあるべきか？」(Phdr. 258d7, 259e1-2, cf. 274b6-7)はこの点に照準を定めている。この問に対して回答が与えられれば、そこに美とロゴスとエロースの関係は明らかになるだろう。

## 2. 『パイドロス』における「哲学的レトリケー」の扱いとイソクラテスの存在

この対話篇は、3つの演説の実例が提示される前半と、それを使ってロゴスの行使の仕方を反省する後半から構成される。弁論家リュシアスを書いた、エロースについての演説的弁論（エピダイクティコス・ロゴス）の原稿を手にしつつ、それをパイドロスが有頂天になって朗読することで、ソクラテスとの問答は始まる。この場面設定で留意すべきこととして3点を指摘したい。

(1) 目で読まれるより、口頭で語り聴かれることを重視する文体的特徴をもつ<sup>10</sup>リュシアスの演説は、暗記したうえで音読するためのテキストとして全文が引用されているので、弁論について、literal と oral の両側面が問題にされている (cf. 276e5-9)。

<sup>8</sup> 一色 (2015) 161-162.

<sup>9</sup> 1988年3月22日のギリシア哲学研究会における岡部勉氏の指摘による。

<sup>10</sup> 細井 (2001) 455.

(2) ロググラポス（法廷弁論代作人）であるリュシアスの現存作品にあつて、本篇は唯一のエロース讃美の *paignion* である<sup>11</sup>。演示的弁論が吟味されるので、弁論術批判は、讃美と非難の妥当性に関わる詩人批判に近づけられている。

(3) リュシアスの引用作品は現在に至るまで、プラトンの手になるパスティッシュの疑いが晴れない<sup>12</sup>。しかし、リュシアスの文体による模倣であると、ただちに分かるような演説である場合、その趣向はプラトンの意図をより一層効果的に実現する装置となりうる。従来の研究は、『パイドロス』に象嵌されたリュシアスの演説が、内容と形式<sup>13</sup>についてソクラテスの酷評を浴びせられるのを見て、演説の真作性<sup>14</sup>と構成<sup>15</sup>の問題ばかりに関心を向けてきた。しかし、プラトンがさしあたりこの演説に対して注目を要求しているのは、無内容な滑らかな言葉の美しい響きに陶然とする態度である。リュシアス演説についてプラトンが難ずる点は、リュシアス自身の現存法廷弁論ではなく、讃美と非難を趣向とするイソクラテスの演示的弁論に豊富に確認されるので<sup>16</sup>、リュシアスの役回りは、演示的弁論の執筆を本領とし、若いときにロググラポスであったイソクラテスに相似するように意図的に造形された、隠れたイソクラテス批判のための布石となりうる。単純な偽作説は、「なぜプラトンはリュシアスの名前で稚拙な演説を創作したうえで、それを徹底的に批判するのか？」という、まっとうな疑問を生んでしまう。翻って、プラトンが自己の作品中に、ステファヌス版で4頁の長さにわたって、リュシアスの公刊された演説の広範な逐語的引用をおこなうことも、かれの文体模倣の才能とその実践を思い合わせるとき、考えにくい<sup>17</sup>。リュシアスの演説は、真作でも単純な偽作でもなく、イソクラテス批判のためにリュシアスに仮託した文体模倣であると解釈すると、『パイドロス』における据わりがよくなる。各部分が、全体の目的実現のために、その機能をよく果たすことを求める<sup>18</sup> 言論の有機体説（264c2-5）の教えのとおり、冒頭における隠れたイソクラテス批判が、対話篇末尾のイソクラテスへの明示的言及と呼応関係を生むからである。プラトンが公然と批判しようとする場合、想定されている著作年代（前360年頃）に存命のイソクラテス（没年は前338年）より、すでに死亡しているリュシアス（没年は前380年頃）を標的にする方が、無用の軋轢を生まないことは言うまでもない。イソクラテスは、プラトンに先んじて哲学教育の学校を創設した、プラトンの強力なライバルであった。対抗心とともに社交的配慮の必要な人物であると思われる。

<sup>11</sup> Dover (1968) 70.

<sup>12</sup> Yunis (2011) 98. ‘Lysianic features suggest rather imitation, of which Plato was a master.’

<sup>13</sup> 234e5-235a8 (論法), 242d4-243a2 (内容), 264b3-e2 (構成). Yunis (2008) 242 n.19 をも参照せよ。

<sup>14</sup> Hackforth (1952) 17-18 および Rowe (1986) 142-143.

<sup>15</sup> Hackforth (1952) 31 および Rowe (1986) 143-145.

<sup>16</sup> Thompson (1868) 178. cf. Nightingale (1995) 154 n.44.

<sup>17</sup> Rowe (1986) 142-143.

<sup>18</sup> Yunis (2011) 193 on 264c3-6.

リュシアスの演説とソクラテスの2つの演説について、次の4点をまず注意したい。

(1) 「右のエロース」の通俗版を意識しながら、「左のエロース」を逆説的に語るリュシアスの演説は、聴き手を魅了するための無内容 (alogon) なスタイルの美<sup>19</sup>を提示している。

(2) ソクラテスの第1の演説は、「左のエロース」を語ることは嘘<sup>20</sup>を語ることだという予防線を張ったうえで、「左のエロース」の問題性を浮き彫るために、方法的改善としての定義を試みている。

(3) 演説の対象が、「左のエロース」から「右のエロース」へ転換するのは、「左のエロース」を語ることに呵責をおぼえるソクラテスに対する、ダイモニオンの介入 (242b8-c3) を契機とする。

(4) 「右のエロース」を語るソクラテスの第2の演説は、エロースの本性と機能を総覧したうえで、宇宙論的展望のもとにエロースを動力とした善き生の形成を論じる。演説は論証 (apodeixis)<sup>21</sup>として組織されているが (245c1-2)、真相の開示を受けたことを確信するパイドロスに対する効果は、驚異によって圧倒したのみで、いまだ吟味を経ていないので、たんなる説得にとどまっている (257c1-2)<sup>22</sup>。ソクラテスも弁論家の技に対する哲学的問答家の技を提示したのみで、両者の異なりは明らかにしていない。パイドロスを美でもって圧倒した言葉は、どのようにして生まれるかが、なお問われねばならないので、kalōs なロゴスの行使の在り方を探求する本対話篇の歩みは、半ばに達したにすぎない。

前半における3つの演説の例示を、「左のエロース」を語ることから「右のエロース」を語ることへの転換として、ソクラテスは総括する。演説が、なぜエロースに対する非難から讚美へと移行することができたのか (265c5-6)。ソクラテス自身の2つの演説について、「反対の事柄を主張する技術」 (antilogikē, 261d10) による語りを可能にした原因として、ディアレクティケーの概念が提示される。ディアレクティケーの2部門である総合と分割について、伝統的解釈は、総合による類Gの把握はFの定義の前提にとどまり、類Gを下位の種Fへ分割することによる定義の獲得を、分割の手続きと捉えた。この解釈によれば、総合と分割はいずれも定義の形成に関わる。それに対し、早瀬の新しい解釈<sup>23</sup>は、総合によるFの把握はそのままFの定義をなす、すなわち、定義の形成のため

<sup>19</sup> 一色 (1996) 16-17.

<sup>20</sup> Sinaiko (1965) 31.

<sup>21</sup> Yunis (2011) 135 on 245c4. deinoi と sophoi の対比については、Yunis (2011) 135 on 245c2. なお、この論証はさしあたり信を生むか否か (apistos/pistē) が問われていることに注意すべきである。

<sup>22</sup> Heath が、『ゴルギアス』は ‘the possibility of persuasion based on knowledge, even though it conveys only conviction.’ を知らないと指摘するのは興味深いものの、この可能性が『パイドロス』において「真のレートリケー (true rhetoric)」の概念によって再認されたというかれの提案には与することができない。cf. Heath (1989a) 157. 本文に引証した2箇所 (245c1-2 および 257c1-2) は、‘the status of the palinode’ (Heath, 1989b, 189) を解明するための重要な手掛かりを提供すると考えるが、現在の研究はまだこの箇所に十分な注意を払っているとは言えない。

<sup>23</sup> Hayase (2016) 111-141.

の総合に対して、分割は定義の形成をこえる部分を本領とする、と考える。この問題については、伝統的解釈を採る脇條<sup>24</sup>と早瀬の間で論争があるが、総合と分割は対話篇の前半の歩みの反省によって抽出されているので、前半がどう語られたかを顧慮せずに、総合と分割が何かを決めることはできない。『パイドロス』において、第1の演説を終えたソクラテスが「エロースについて汚れた話をした」と咎めの気持ちに苛まれていたときに、ダイモニオンの介入によって、狂気としてのエロースの全体像が把握された。類としてのエロースは端的な発見の対象であるので、早瀬の解釈を採る。ソクラテスは対話篇の前半部分を回顧して、「非難と讃美が可能になるまで、エロースの分割の手を休めなかった」

(266a4-b1)と表明していたので、非難と讃美は分割の目的と相即する。分割の機能が定義の確定をこえる部分を本領とするなら、とうぜん、意味発見(266a5, 7)の手続きであるディアレクティケーと意味伝達の手続きであるレートリケーの関係が問われてくる。

レートリケーについて、技術的に把握されてもディアレクティケーに還元できない、ソクラテスの言う「レートリケーの残されている部分」(to leipomenon tēs rhētorikēs, 266d3-4)とはなにか。この句の提示の後、議論はしばらく弁論技法を概観する迂路をとるので、パイドロスは、弁論家が案出した技術的細目、すなわち、「レートリケーの持つ残余の部分」という意味に取ったことが明らかであるが、ソクラテス自身は、この句に「レートリケーという(論じ)残されている部分」の意味を込め、レートリケーの存在自体を問題にしようとしたと考えられる。(属格は *partitive* でも *possessive* でもなく<sup>25</sup> *appositive* に解する。)この問題の論定に関与的なポイントとして、次の5点が重要であると考えられる。この5点を整合的に説明することができるか否かで、取るべき解釈の適合性の試金石としたい。特定のポイントのみでとどめを刺すことはできないので、心証の集積効果が論定にとって大事である。

**事柄 (res) の真相を知ること (265d3-266b1) ①**とは、エロースの本体に観入しつつ、エロースの本性の表と裏を見分けることによって、多様な意味のネットワークの内にエロースを位置づけることであり、それを可能にするのは総合と分割によって構成されるディアレクティケーの仕事である<sup>26</sup>。**説得相手の魂 (homo) の真相を知る (269e4-271b5) ②**ための手続きは、事柄の真相を知ることと同様であると述べられるが(277b9)、事柄の真相はディアレクティケーによって明らかになるので、魂の本性を解明するのもディアレクティケーであると考えられる<sup>27</sup>。解明された魂の本性の考察にもとづいて、魂のそれぞれの類型にいかなる弁論の技法(266d5-267d9)をどのように適用するか、すなわち、説得(272a3)の技術的可能性が課題として問われるが<sup>28</sup>、問題は、この説得の技術をプラトンが「レートリケー」として、本格的に定立しているか否かである。

<sup>24</sup> 脇條 (2018a) 49-60.

<sup>25</sup> Pace Ryan (2012) 277 on 266d3-4.

<sup>26</sup> 一色 (1996) 19.

<sup>27</sup> 野津 (2006) 14 および Yunis (2011) 236 on 277b7-c1.

<sup>28</sup> 野津 (2006) 14.

プラトンは、哲学的レトリケーの構想について、本来的説明ではなく**正しい指南書の素描 (271b7-272b4) ③**を語ることで、概略の提示にとどめている。技術的に大変な課題<sup>29</sup>であるからというのが表向きの理由 (271c6-7, 273e3) であるが、プラトンの徹底性を考えると、必要があれば詳論すると思われるので、概要の紹介にとどめる態度は、レトリケーの本格的定立に積極的ではないことを示唆すると取ることもできる。本来的レトリケーの定立という課題の困難さは、それが神的徳の人間による模倣に帰する<sup>30</sup>ところに生まれるが、神的模倣は、そもそも、真理発見の技術であるディアレクティケーの仕事である。

哲学的レトリケーの構想を語るときも、ソクラテスは「レトリケー」という用語とその語族 (269b3, 7, 8, c2, 7, 9, d4, e2, 270b2, 271a5, d1, 272d7) を用いて論を始めるが、やがてそれを「言論に関わる技術」(270a7, 271c2, 272b4, 273a3, d7) という表現に置き換え、最後は「言論に関して人間に可能な限りの技術を身につける者」(technikos logōn peri, 273e3-4, cf. 274b3) という注意深い言い回しによって語り終える<sup>31</sup>。先行する議論の要約に現れる 272d7 の用例を除けば、『パイドロス』における「レトリケー」とその語族の用例は、あるべきレトリケーの素描を語り始める 271d1 を最後とする。『国家』以降、ディアレクティケーは真理発見とともにその伝達の技術であると考えられる<sup>32</sup>ので、ディアレクティケーを語れば、そこにレトリケーは含意される、ないし、レトリケーを追究すれば、それはディアレクティケーに回帰する、というスタンスをプラトンはもっている。「レトリケー」という術語の使用から判断すると、哲学的レトリケーの構想は試論的な可能性の提示にとどまるように考えられるが、プラトンが与える**本来的説得の実践の描写 (276e4-277a4) ④**を検討するとき、この想定は強化される。拡張されたディアレクティケー概念のうち、意味伝達の部門を指すとき、たしかにプラトンは『パイドロス』においてそれを「レトリケー」と呼ぶが (270b2, 271a5, d1)、結論部が語る哲学教育の場における言語のレトリカルな使用は、この哲学的レトリケー概念の提示の後も、「ディアレクティケーを用いて」と表現されていて、「レトリケー」の語は使われない (276e5-6)。その理由として 3 つの可能性が考えられる。この句の「ディアレクティケー」は、①意味発見に関わる狭義のディアレクティケーが意味されている、②『パイドロス』においてプラトンが定立した、レトリケーと置換可能な、意味伝達に関わるディアレクティケーが意味されている、③意味発見とともに意味伝達の方法である、『国家』以降の拡張されたディアレクティケーが意味されている<sup>33</sup>。問題の箇所は、説得のための言語の使用の文脈であるので、①の解釈は取りにくい。②の解釈を採る場合、ここでも

<sup>29</sup> Yunis (2011) 215 on 271c6-7.

<sup>30</sup> Yunis (2011) 221 on 273e3.

<sup>31</sup> 尼ヶ崎 (1984) 34 註(11) の網羅的な用例分析の一覧表を見よ。

<sup>32</sup> Yunis (2011) 234 on 276e5.

<sup>33</sup> Yunis (2011) 234 on 276e5: *tēi dialektikēi technēi*. ‘the truth-discovering capacity of dialectic is functionally intertwined with its communicative capacity’.

プラトンはレートリケーという語の使用に積極的ではないことになる。レートリケーという語は、プラトンが案出したことが近年主張されているが、本来的レートリケーを「定立」した後、『パイドロス』の結論<sup>34</sup>においてもプラトンがこの語の使用に積極的ではないとしたら、定立について再考の余地はないであろうか。したがって、③がもっとも好ましい解釈である。哲学的レートリケーの構想は、拡張されたディアレクティケー概念の内に再吸収されている。じじつ、『パイドロス』においても、ディアレクティケーは思考と言表の方法であると言明されていた（266b4-5<sup>35</sup>）。哲学教育におけるレートリケーのあり方について、プラトン（前 427-347）と異なる考え方をもち同時代人がイソクラテス（前 436-338）である。試行的にレートリケー概念を提示した後にその回収にかかるプラトンの議論法には、イソクラテスに対する対人論法的な意識を想定してもよいとおもわれる。

**イソクラテスに対する評言（278e8-279b2）⑤**の真意を確定するために、評言そのものが語られる前の伏線にまず注目したい。プラトンの伏線の張り方が、簡潔で抑制的な評言の理解の仕方を教えていると考えられるからである。プラトンが哲学的レートリケーの定立に積極的でないのは、**(1) ディアレクティケー一元論**の哲学の構想によって、レートリケーの領域はカバーできると考えるからであるが、これはそのままレートリケー一元論の哲学を標榜するイソクラテスに対する批判となっている<sup>36</sup>。ソクラテスの語るころ、パリーノーディアアのミュートスも「論証」（245c1-2）に他ならず、聴き手に配慮したレトリカルな構成が与えられている3篇の演説の進行全体も、ディアレクティケーの働きとして分析されている（265c5-266b1）。これは『パイドロス』の全体に関わる論点である。

**(2) 書かれた文字の批判（274b6-277a4）**は、素材として、イソクラテスが前 390 年頃に公表した『ソフィスト反駁』に伺われる思想に対して、アルキダマスが批判的に応答した書『書かれた言論の作家あるいはソフィストについて』を利用している。（ただし、2 書の前後関係は確定できていない<sup>37</sup>。）アルキダマスの間接的引用によって、書かれた文字の批判を、そのまま、暗黙のイソクラテス批判として妥当させる意図がプラトンにはある<sup>38</sup>。しかし、アルキダマス自身の用語である *empsychos logos*（生動する言葉）もプラトンの *logos en psychēi*（魂の内なるロゴス）の観念によって退けられ、弁論術と異なるプラトン固有のロゴス観が提示される。ただし、アルキダマスの名前は伏せられているので、かれはプラトンの批判の最終目標ではない。名前が明示されるのはイソクラテスである。アルキダマスからの転用である<sup>39</sup>「哲学者」と「作家 (*poiētēs*)」の区別を確

<sup>34</sup> 『パイドロス』の全体的構成と結論の位置づけについては、一色（1996）13-24 を見よ。

<sup>35</sup> Yunis（2011）199 on 266b5.

<sup>36</sup> イソクラテスが「レートリケー」という語を一切用いなかった理由について、弁論術を形式的な理論ではなく、実践的な営みとして扱う彼の態度に求める、納富信留の見解に従う。納富（2021）484.

<sup>37</sup> Muir（2001）xiv-xv.

<sup>38</sup> 廣川（1984）208,212.

<sup>39</sup> 納富（2015）329-330.



認して『パイドロス』の問答が実質的に終了するとき、対話の内容の眼目を報告する相手として、**(3) リュシアスとイソクラテスの名前**が披露される。ここ (278e8, 10, 279b2) は『第 13 書簡』(360c4) を除けば、Corpus Platonicum で唯一イソクラテスの名前が明示される箇所である。リュシアスについては、仲間のパイドロスに委ねる提案をしたソクラテスに対して、パイドロスが、ソクラテスの仲間であるイソクラテスに伝える役割を、ソクラテス自身に振ったのである。リュシアスを批判の矢面に立たせたのは一貫してソクラテスであったのに、なぜパイドロスが報告に行くのであろうか。ソクラテスは対話篇をつうじてパイドロスをリュシアスの(修辭的技巧の)讚美者(erastēs, 236b5, 257b4, 279b3<sup>40</sup>)と呼んでいるので、パイドロスに批判的コメントを期待することはむずかしい。「仲間(hetairōi, 278e4)」であるからという理由は、あきらかに弱い。リュシアスは演説原稿の多産な作者であり、それを流通させることによって文才を高めた点で、アテナイの弁論術文化の代表者として、イソクラテスを先取りしている<sup>41</sup>。リュシアス風の弁論術の手法に対する批判(269d2-8)の真の標的はイソクラテスであった<sup>42</sup>。リュシアスは表向きの標的にとどまり、本来の批判対象ではないとすると、イソクラテスに対する明示的言及の意味は軽くない。書かれた文字の批判を前提するとき、イソクラテスは哲学者ではなく作家のカテゴリーに属することが、ソクラテスの報告の眼目になると、想定されるからである。イソクラテスに向けられるソクラテスの報告の方に、本来の意味があると考えべきである。

「ある種の(tis, 279a9)」を付した哲学の存在を「若き」(neos, 278e10)イソクラテスに帰すソクラテスの言葉(279a2-b3)は、若いイソクラテスに対する肯定的な評言であり、老年にいる現実のイソクラテスには開かれたスタイルを取るので、穏やかなコメントになっている。ソクラテスに「私淑」<sup>43</sup>し、『ソクラテスの弁明』のスタイルに倣って『アンティドシス』を構想するイソクラテスにとって、自分のことを愛し子と呼ぶソクラテスの最後の言葉は快いはずである。しかし、『アンティドシス』(プラトンの死の6年前である前353年頃刊行)においても、イソクラテスのプラトン批判が止まないのは、なぜであろうか。若い時にはリュシアス同様にロゴグラポスであったイソクラテスは、前390年頃に自らの修辭学校を開いた後は、ロゴグラポス時代の自分に触れたがらなかったと伝えられる<sup>44</sup>。ただ、イソクラテスは成熟してからも演説の執筆に注力していたので、その点はリュシアスと変わらない。プラトンは対話篇の後半冒頭で、「文章を書くこと(to graphein logous)自体は恥ずべきことではない」(258d1-2)と、一種の拡張したロゴグラポスの観念をソクラテスに語らせるが、リュシアスに対するロゴグラポスのレッテル

<sup>40</sup> Yunis (2011) 9.

<sup>41</sup> Yunis (2011) 8.

<sup>42</sup> 廣川 (1984) 202, 229 註(18).

<sup>43</sup> 小池 (1998) 274.

<sup>44</sup> 廣川 (1984) 27.

貼りは、プラトンによる創作<sup>45</sup>と考えられるので、イソクラテスの劣等感を逆撫でする嫌みなコメントにもなる。成熟期のイソクラテスは、法廷弁論でも民会弁論でもなく政治性を含む演示的弁論の執筆にいそしんでいた<sup>46</sup>。法廷の弁論代作人（ロゴグラポス）であったリュシ阿斯に、演示的弁論それも破格の構成をもつ *paignion* を書かせ、それを全文引用する行為には、プラトンの明確な意図があるはずである。馬鹿馬鹿しい演説を書くリュシ阿斯とそれにのぼせ上がるパイドロスの姿の造形は意味深長であり、リュシアスの演説の引用は、さらに、ソクラテスのパリノーディーアに公然と比較される。リュシアスの存在がこのように軽くなるのに応じて、その裏に仮託されている人物の重みが増す仕掛けと見ることもできる<sup>47</sup>。「若い」という語が、評議会に参加することが許される30歳まで適用可能であるとする場合<sup>48</sup>、対話設定年代のイソクラテスには、ロゴグラポスであった事実が含意されうる<sup>49</sup>。対話篇のリュシ阿斯にイソクラテスが仮託されていると考えることには、相応の理由があると思う。

実質的なイソクラテス批判が集約されているのが、「哲学」に付された *tis* の語である。『パイドロス』に一貫するディアレクティケーとレートリケーの対立<sup>50</sup>は、名文家（228a1-2）であってもリュシ阿斯は批判の第一の対象にはなりえないので、プラトンとイソクラテスの対立と見ることができる。哲学教育に関わる前の、ロゴグラポスであった若きイソクラテスに投影する形で、対話篇執筆年代のイソクラテスに対するプラトンの評価が語られる<sup>51</sup>問題の箇所には、ディアレクティケー一元論（哲学＝ディアレクティケー）が真正の哲学であり、レートリケー一元論を語るイソクラテスの哲学（哲学＝レートリケー）は「ある種の」哲学にすぎないというニュアンスが込められている。プラトンの実質的なイソクラテス批判は、リュシ阿斯を標的にしたスタイルを取っているが、イソクラテスが相手だということは、見る人が見れば分かるので、若きイソクラテスに仮託する形で、他の弁論家と異なる「ある種の」哲学をもつという、将来に可能性を開くコメントによって締めくくられる。Ad rem な手厳しい批判は、イソクラテスの名前を披露した *ad hominem* な批評においては、肯定形によって否定的内容を語るエイローネイアに包まれた形に変更されている。同時代を生きるアテナイ人であり、社交感覚が必要な相手であっても、異なる哲学教育の理念を語るライバルに対する批評を公にするためのスタイルが、リュシ阿斯と若きイソクラテスへの仮託そしてエイローネイアである。対話篇の最後で、あえてイソクラテスの名前をプラトンが開示したことは、批判の内容についての、かれの揺るぎない自信と論拠の所有の表現であると思われる。

<sup>45</sup> Yunis (2011) 170 on 257c5 ‘a convenient fabrication’.

<sup>46</sup> 柿田 (2012) 15-17.

<sup>47</sup> 廣川 (1984) 189.

<sup>48</sup> Yunis (2011) 244 on 279a1-2.

<sup>49</sup> 廣川 (1984) 24.

<sup>50</sup> 一色 (1996) 13-24.

<sup>51</sup> Yunis (2011) 245 on 279a6-7.

効果的な弁論活動について、語る主体の確立の問題に注力したプラトンは、ディアレクティケー、具体的には、ロゴスと自己認識を重視した。ロゴスは主観と客観の両方に関わるので、resはhomoの問題でもある。説得を成立させる語りの実践に注目するイソクラテスは、時宜（カイロス）にかなう通念にしたがった判断（ドクサ）を重視した<sup>52</sup>。逆説を語るリュシアスの演説のレトリカルなおもしろみに興味を示すパイドロスの姿には、その反映があるかもしれない。同じゴルギアスを師に仰ぎつつも、リュシアスはゴルギアスと同系の弁論の技術家であるのに対して、弁論教育によって哲学教育を目指すイソクラテスは、レートリケー一元論の哲学を語る。弁論術と哲学の対決を描く『ゴルギアス』における弁論術批判<sup>53</sup>の改訂を促したのは、プラトンとまったく異なる哲学教育の理念を語るイソクラテスの存在である<sup>54</sup>。神的な *sophiā* からの断絶と回帰を強調するプラトンの厳密学としての哲学（278d3-6）とイソクラテスの弁論術的教養としての哲学の対決を描く課題は、プラトンにも力量の成熟を要求したに違いない。*philosophiā* の語が『饗宴』『パイドン』『国家』でいちじるしく多用され、後期作品でその使用が激減すること、中期作品では「真正の哲学」「真実に哲学する」のように「哲学」の語に限定表現が付加されること、『パイドロス』に対するイソクラテスの反論の書である『アンティドシス』に *philosophiā* の語が頻用されることを、廣川洋一が指摘しているが<sup>55</sup>、『パイドロス』の課題に思い合わせるとき、示唆的である。

本節の主張をまとめたい。本来のレートリケーの構想にしたがって提示される「レートリケー」の語が、議論の途中で回収されて使われなくなる事実を軽視することはできない。レートリケーがなくても、レートリケーに期待される説得の役割はディアレクティケーが果たすことができる、と考えるプラトンが、「レートリケー」の語を使ってそれを実地に示したと解することができる。「レートリケー」の語の提示と回収の原因として、レートリケー一元論の哲学を語るイソクラテスを意識した対人論法の使用を考慮する必要がある。『パイドロス』の明示的な批判対象はリュシアスであるが、リュシアスに仮託する形で、全篇にわたって、イソクラテスが本来の標的とされている可能性が高いことを想定すべきである。

### 3. 美的説得とエロース

イソクラテスに対するプラトンの批判は、次に引用する、哲学教育における言語のレトリカルな使用の描写に、その結論を見ることができる。（内容的分節を、(1) (2) (3)

<sup>52</sup> 納富（2021）483.

<sup>53</sup> ただし Thompson（1868）173.

<sup>54</sup> Asmis（1986）167.

<sup>55</sup> 廣川（1998）5-8.

によって示す。)

「そういうことさ、パイドロス。だけどぼくが思うには、そのこと [正義など] についての [遊びよりも] ずっと美しい真剣な努力が生じるのは次のときだ。

(1) すなわち、人がふさわしい魂に出会った後、ディアレクティケーの技術を用いて、エピステーメーとともにロゴスを播き、植え付けるときだ。(2) そのロゴスとは、自分自身と植え付けたひとを助けることができるものであり、さらに必ず実を結ぶように種を持っているものなのだ。それゆえ、[そのロゴスは] 異なる性格の中で異なるものに育つことによって、その種子を常に不死とすることができる。

(3) そして、それを持つ者を、人間に可能な限り最も幸福にすることができる。」

(*Phdr.* 276e4-277a4 <sup>56</sup>)

プラトンが書かれた言葉を批判するとき、それはそのまま「生きて魂をもつ」(zōnta kai empsychon, 276a8) 話される言葉の肯定を意味しない。「生きて魂をもつ」という言い回しは、パイドロスがあきらかにアルキダマスから学習した<sup>57</sup>もので、ソクラテス自身は、この対話篇の内でも外でも、決して使うことがない<sup>58</sup>。ソクラテスが重んずるのは「学ぶ者の魂にエピステーメーとともに書かれている言葉」(hos met' epistēmēs graphetai<sup>59</sup> en tēi tou manthanontos psychēi, 276a5-6) である。したがって、表現の微妙な相違を含むにもかかわらず、パイドロスの「生きて魂をもつ言葉」への言及に、最も強い肯定句をもって応ずるソクラテスの言葉「全くそのとおり」(pantapāsīn men oun, 276b1) は、アルキダマスのイソクラテス批判を最大限に利用するための、プラトンのエイローネイア<sup>60</sup>として理解すべきである。プラトンが en psychēi の句にこめた empsychos と区別される意味は、この対話篇の内容を総括する結語部分で確認される。

「他方で正、美、善について教える言葉、学びのために語られ、真に魂に書かれる (graphomenois en psychēi) 言葉の中にだけ、明晰で完全で真剣さに値するものが存在すると考える人……このような人がおそらく、パイドロス、君もぼくもどうか

<sup>56</sup> 西洋古典叢書所収の脇條靖弘訳 (2018b) に従いつつ、私見によって手を加えた。

<sup>57</sup> Alcidas, *Soph.* 28: *empsychos esti kai zēi*. cf. Hackforth (1952) 162.

<sup>58</sup> したがって、empsychos という言葉の同一性を頼りに、言葉の生動性と魂の自動性 (245 e5-6) を連絡させようとする試み (Yunis, 2011, 232) には、その安易さを警戒しなければならない。

<sup>59</sup> graphēin の現在完了分詞を使って表記される「書かれた」文字 (277e5, 278c6) の場合と異なり、魂に「書かれる」ロゴスを表すとき、プラトンは graphēin の現在形 (276a5) と現在分詞形 (278a3) を用いる。定動詞と分詞の使い分けに意味がある場合、前者は、「書かれる」という動作とともに「書かれている」という現在の持続的状态 (Smyth, 1887) を表し、後者は、教える際の「(魂に) 書く」という行為が、完了することなく、常に試みられ繰り返される性格 (Smyth, 1872.a.3) を持ち続けることを示すと思われる。

<sup>60</sup> 加藤 (1959) 83 註(7) = 加藤 (1997) 266 註(7)。

そのようになれるようにと、ぼくも君もお祈りするであろう、そういう人なのだ。」(278a2-5 and b2-4)

この引用で、魂に書かれる言葉と対照されるのは、楽しみや記憶のためあるいは説得のためだけに語られる言葉である。したがって、正・善・美の習得にあつて、*en psychēi* の限定はきわめて重要になる。ソクラテスがエピステーメーに言及する次の2つの引用を見れば、「魂に (*en psychēi*)」書かれている言葉の成立にあつて、エピステーメーが果たす積極的な役割が確認される。

「正、美、善のエピステーメーを持っている人は、自分の持っている種について、農夫よりも思慮がまともでないとぼくらは言うかい？」(276c3-4)

「人がふさわしい魂に出会った後、ディアレクティケーの技術を用いて、エピステーメーとともにロゴスを播き、植え付けるときだ。そのロゴスとは、自分自身と植え付けたひとを助けることができるものであり、さらに必ず実を結ぶように種を持っているものなのだ。」(276e5-277a1)

2番目の引用における「エピステーメーとともに」(*met' epistēmēs*, 276e7) は、フェラーリが註記するように<sup>61</sup>、語り手の語り方と聴き手が受容する内容の両方を限定する句である。語り手がエピステーメーを伴って語ることによって、エピステーメーを伴った言葉が魂に書かれることが、プラトンの考える、言葉による知識の教授と学習であるとおもわれる。したがって、*empsychon* (魂をもつ、生動的) と *en psychēi* (魂に) という言い回しの微妙な差異は十分に留意されるべきである。内なるロゴスの獲得があつて、はじめて、言葉は真の生動性をもつ。ソクラテスの批判は、内的ロゴスを欠く、書かれた言葉の華麗さにも話される言葉の生動性にも、ひとしく向けられている。ゴルギアスの忠実な弟子であるアルキダマスには、知識に基礎づけられた言葉という観念は無縁であったが<sup>62</sup>、プラトンの見るところ、アルキダマスに批判されたイソクラテスも、その点では、アルキダマスと同類であったに違いない。

魂の内なるロゴスの獲得は想起によって可能となるので、内的ロゴスは操作の対象ではありえない。言葉がエピステーメーを伴って魂に書かれ内化するとき、ロゴスが自己と美に与えられる。自己が内的ロゴスを備えることは、デルポイの箴言の勧告する自己認識(229e5-6)の完成を意味する。美がロゴスを獲得するとき、ロゴスをもたない無内容の美であることを止める。自己認識の完成とロゴスを得た美の獲得の2つが備わって、はじめて美的な説得は可能になるとプラトンは考えている。それが『パイドロス』の議論を導

<sup>61</sup> Ferrari (1987) 278.

<sup>62</sup> McCoy (2009) 50 n.7.

いてきた *kalōs legein* の仕方の探求の収斂点である。言葉を行使する既定の方法を巧みに用いても、言葉は美しくならない。なすべき行為の外化は、行為者による行為の因果論的な表現に他ならない。ロゴスを働かせる行為を限定する副詞である *kalōs* は、行為の様態あるいは行為の対象ではなく、行為主体のあり方を問う語であった<sup>63</sup>。ロゴスを働かせる行為の巧みさと語る内容だけに熱中しても、ロゴスは決して美しくはならず、行為主体が美に成就して、はじめて美しくロゴスを行使することができるという主張が、この対話篇の結論である。ディオティマが語る美の教説の現実的適用をもって、規範的価値の知的把握の不可能性とアカデメイアの哲学の非实际的性格を難ずるイソクラテスの批判<sup>64</sup>に対する回答を、プラトンは提出している。<sup>65</sup>

ここでもう一度、本節の冒頭に引用した『パイドロス』の結論部に戻りたい。主導的な存在（成人男性）が受動的な存在（少年）に対しておこなう説得の活動は、ロゴスの発出と受容の絶えることのない連鎖として描かれている。しかし、ロゴスの授受は、性的快楽

<sup>63</sup> プラトンにおける行為と副詞の問題については、岡部勉の議論（岡部 1995, 38-40）を参照のこと。ただし、*kalōs* が行為の様態を記述する副詞ではないことには賛成するものの、行為の結果と関わるという岡部の主張には賛成できない。行為の外化は行為の因果論的表現を前提すると考える。

<sup>64</sup> 廣川（1984）193.

<sup>65</sup> プラトンとイソクラテスの関係の論定には、内証（著作）と外証（伝承・論争）の2つを考慮する必要がある。

イソクラテスの著作にはプラトンの名への言及がない。cf. 納富（2021）436. プラトンの著作でイソクラテスに明示的に言及しているのは『パイドロス』のみであり、本文で論じたように、若きイソクラテスへの仮託とエイローネイアを考慮に入れないと、プラトンの真意は容易に測ることができない。さらに、多頭的なこの対話篇は、伝承の過程で様々な副題が付されたように、古代において、すでにきわめて読みにくい作品になっていたことにも、留意すべきである。エイローネイアが読み取れないと、イソクラテスに対するプラトンの応答は、単純な友好的関係と解されやすくなる。両者の非敵対的関係を伝える伝承も、解釈伝統のこの傾向と無関係ではないとおもわれる。

プラトンは現実のポリスと利害の共有をもたない *disinterested outsider* であるのに対し、イソクラテスはドクサの上書きをつうじた緩やかな社会変革を構想する *insider* である。cf. Nightingale（1995）59. 両者の「哲学」の理論的裏付けとしての著作の結構は、プラトンの方が優れているかもしれないが、それが凡てとは言えないと考え、イソクラテスが『パイドロス』以後もプラトン批判を続けたことは、充分想定可能であるとおもう。

プラトンがイソクラテスの圧倒的な影響の下にヒアトゥスを回避する文体を作ったことと、イソクラテスの哲学観に対する対抗心を持ちながら自己の哲学を形成したことは、両立すると思われる。イソクラテスに対抗心を抱くアリストテレスが、『弁論術』でイソクラテスの作品から引証していることは、なんら不思議ではないと、Cope が論じていること（Cope, 1867, 41-43）は、傍証になるかもしれない。

初期アカデメイアとイソクラテスの関わりを知るための資料として、アリストテレスの『修辞学』と『ニコマコス倫理学』（X9）が重要であるが、その前提として、観想知と実践知について、両者の分離と統合を図る『プロトレプティコス』を拠点に、観想知からの実践知の帰結を論ずる『国家』と実践知の実際の運用を重んずる『アンティドシス』に対するアリストテレスの応答関係を洗い出したうえで、両者の分離を説く成熟期のアリストテレスを展望する藤澤令夫の論考に注意したい。藤澤（1973）6 註(15), 18 = 藤澤（1980）226 註(15), 224. プラトンと同じく、学として哲学を構想するアリストテレスのイソクラテス観は、基本的に競争的ないし対抗的であったと想像される。

この註を纏めるに当たって、セミナーにおける荻野弘之氏のご質問、および、メールによる納富信留氏と渡辺邦夫氏のご教示を参考にしたことを、感謝とともに記しておく。

ではなく魂のふさわしさが導き手と受け手の関係を保証する、教育的関係である。美しい人を見た恋人は、愛人が宿すゼウスの性格の模倣を試み、恋する人も恋される人も互いのゼウスの性格の強化を目指す<sup>66</sup>ので、通念においては一方向的な少年愛は、注意深く、相互的な関係に書き換えられている。エロースの関係の永続的な連鎖を可能にする言語的教導は、エロースの純化<sup>67</sup>によって支えられる。エロースの純化とは、魂のヌースとしての性格を際立たせることである。パリノーディアーが描く魂の3部分説を使えば、ヌースをイメージする馭者と、かれが操る気概と欲望をそれぞれイメージする2頭の馬を、ヌースの色合いに染めることによって、魂全体の統一性を高め、ヌースの観想的性格を純粋に実現することである<sup>68</sup>。純化されたエロースは、恥じらいの念によって美にたいして抑制的になり、美しいものを見守る。美しい身体に接して、ひとがまず求められるのは、かかる美に触発された、美しい言葉の産出であった (*Sym.*210a7-8)<sup>69</sup>。ロゴスを得た美に触発されて生まれる美しい言葉に、エロースの連鎖を可能にする種子 (*sperma*, 277a1) が宿る。パリノーディアーは繰り返し (244a6-8, 245b7-c1, 252b8-9)、エロースが神の賜物であることを強調していた。プラトンは、この不死なる種子をもつことを、人間にとっての最大の幸福であると、最後に明言する。

エロースの連鎖は、『饗宴』冒頭の報告 (ディエーゲーシス) の連鎖<sup>70</sup>を想起させるので、『饗宴』冒頭と『パイドロス』結論部の間には、つよい連関が存在することが暗示される。エロースの連鎖の源にあるソクラテスの現存を、『饗宴』は余すところなく語り明かしたが、この対話篇で課題として残された、美的説得とエロースの関係の知識論的解明は、『パイドロス』の後半部にまつ。したがって、エピステーメーの概念を採用した最終部分の議論のもつ意義は大きい。知識論的基礎をもつ美的説得とエロースの関係の解明は、そのままプラトンの哲学概念の説明になり、イソクラテスに対する批判として妥当する。後半部のスタートに意識的に言及され、ムーサイのお遣いの歌声と解釈される蟬の鳴き声は、この最終部分に向けた哲学探求のインテンチオの強化を勧告する<sup>71</sup>劇的趣向である。パイドロスを相手にしたソクラテスの問答自体が、この対話篇で論じられる、エロースを推進力とする哲学的な美的説得に他ならない<sup>72</sup>。

<sup>66</sup> Lear (2019) 53-58.

<sup>67</sup> 小林 (1993) 72.

<sup>68</sup> 一色 (2007) 22.

<sup>69</sup> Robin (1929) xciii. cf. Price (1989) 41 n.43.

<sup>70</sup> 饗宴の様子語り部であるアポドロスに話をせがむ聴き手たちは、哲学よりもアルキピアデスに関心がある様子の実業関係 (*Sym.* 173c6) の人物であり、アポドロスとはエロースよりもフィリアによって結ばれた関係として描かれている。哲学的エロースの発動の前提としてフィリアがあることに注意すべきであると思われるが、この点について、XIII<sup>th</sup> Symposium Platonicum Pragense の報告 (2021年11月3日) で、フィリアとレートリケーの結びつきを強調して『パイドロス』の統一性を論じた Frisbee Sheffield の提言に示唆を受けた。

<sup>71</sup> Yunis (2011) 175.

<sup>72</sup> 2021年9月5日の発表に際しては、発言順に、納富信留・荻野弘之・脇條靖弘・渡辺邦夫・加藤信朗・和泉ちえ・高橋久一郎の各氏からご質問とご意見を頂き、発表後に栗原裕次・渡辺邦夫・納富信留の各氏からメールにてご教示を賜った。司会の労を執られた樋笠勝士氏

## Bibliography

- Asmis, E. (1986) 'Psychagogia in Plato's *Phaedrus*', *Illinois Classical Studies* 11, 153-72.
- Camp, J. van et Canart, P. (1956) *Le sens du mot theios chez Platon*, Louvain.
- Cope, E.M. (1867) *An Introduction to Aristotle's Rhetoric*, London and Cambridge.
- Dodds, E.R. (1959) *Plato: Gorgias*, Oxford.
- Dover, K.J. (1968) *Lysias and the Corpus Lysiaca*, Berkeley.
- Dover, K.J. (1993) *Aristophanes: Frogs*, Oxford.
- Ferrari, G.R.F. (1987) *Listening to the Cicadas: A Study of Plato's Phaedrus*, Cambridge.
- Hackforth, R. (1952) *Plato's Phaedrus*, Cambridge.
- Hayase, A. (2016) 'Dialectic in the *Phaedrus*', *Phronesis* 61, 111-141.
- Heath, M. (1989a) 'The Unity of Plato's *Phaedrus*', *Oxford Studies in Ancient Philosophy*, 7, 151-73.
- Heath, M. (1989b) 'The Unity of the *Phaedrus*: A Postscript', *Oxford Studies in Ancient Philosophy*, 7, 189-91.
- Isshiki, Y. (2003) 'The Beneficial and the Fine: On the Meaning of the Failure of Definition of the Fine in Plato's *Hippias Major*', *The Great Book of Aesthetics* (CD-ROM) Tokyo 2003, no pagination.
- Janaway, C. (1992) 'Craft and Fineness in Plato's *Ion*', *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 10, 1-24.
- Lear, G. R. (2019) 'Plato on Why Human Beauty is Good for the Soul', *Oxford Studies in Ancient Philosophy*, 57, 25-64.
- McCoy, M.B. (2009) 'Alcidamas, Isocrates, and Plato on Speech, Writing, and Philosophical Rhetoric', *Ancient Philosophy* 29, 45-66.
- Muir, J.V. (2001) *Alcidamas: The Works and Fragments*, London.
- Nightingale, A.W. (1995) *Genres in Dialogue: Plato and the Construct of Philosophy*, Cambridge.
- Price, A.W. (1989) *Love and Friendship in Plato and Aristotle*, Oxford.
- Robin, L. (1929) *Platon: Le Banquet*, Paris.
- Rowe, C.J. (1986) *Plato: Phaedrus*, Warminster.
- Ryan, P. (2012) *Plato's Phaedrus: A Commentary for Greek Readers*, Norman.
- Sinaiko, H.L. (1965) *Love, Knowledge and Discourse in Plato*, Chicago.
- Smyth, H.W. (1956) *Greek Grammar*, Cambridge, Massachusetts.
- Thompson, W.H. (1868) *The Phaedrus of Plato with English Notes and Dissertations*, London
- Yunis, H. (2008) 'Dialectic and the Purpose of Rhetoric in Plato's *Phaedrus*', *Proceedings of the*



*Boston Area Colloquium in Ancient Philosophy* 24, 229-48.

Yunis, H. (2011) *Plato: Phaedrus*, Cambridge.

尼ヶ崎紀久子 (1984) 「プラトン『パイドロス』に於けるレートリケーの問題」『美学』138, 25-36.

一色裕 (1996) 「美の理解と探求への受肉—『パイドロス』における美学の問題」『美学』185, 13-24.

一色裕 (2007) 「美にたいするエロースと善き生の形成」『中部哲学会年報』39, 19-30.

一色裕 (2015) 「美の発見と日常性の美学—道徳性の形成における美の役割」土橋茂樹・納富信留・栗原裕次・金澤修 (編)『内在と超越の閾』知泉書館 153-165.

岡部勉 (1995)『行為と価値の哲学』九州大学出版会.

柿田秀樹 (2012)『倫理のパフォーマンス—イソクラテスの哲学と民主主義批判』彩流社.

加藤信朗 (1959) 「書かれた言葉と書かれぬ言葉—Platon: Phaedrus 274c-278b の解釈」『哲学雑誌』742, 79-83.

加藤信朗 (1997)『哲学の道』創文社.

小池澄夫 (訳) (1998)『イソクラテス 弁論集 1』京都大学学術出版会.

小林信行 (1993) 「美と道徳—プラトン『饗宴』の場合」森俊洋・中畑正志 (編)『プラトンの探究』九州大学出版会 61-80.

納富信留 (2015)『ソフィストとは誰か?』ちくま学芸文庫. (2006 人文書院)

納富信留 (2021)『ギリシア哲学史』筑摩書房.

野津悌 (2006) 「『パイドロス』における弁論術—弁論術の成立要件としての「真実」の知」『倫理学年報』55, 3-18.

廣川洋一 (1984)『イソクラテスの修辞学校—西洋的教養の源泉』岩波書店.

廣川洋一 (1998) 「イソクラテスとプラトン」西洋古典叢書『月報』14, 5-8, 京都大学学術出版会.

藤澤令夫 (1973) 「観ること (theōria) と為すこと (prāxis) — イソクラテス、プラトン、および後期アリストテレスとの比較におけるアリストテレス『プロトレプティコス』の哲学思想—」『西洋古典学研究』21.

藤澤令夫 (1980)『イデアと世界』岩波書店.

細井敦子 (2001) 細井敦子・桜井万里子・安部素子訳『リュシ阿斯 弁論集』京都大学学術出版会の解説.

脇條靖弘 (2018a) 「問答法と定義—プラトン『パイドロス』265c-266b」『山口大学哲学研究』25, 49-60.

脇條靖弘 (2018b) プラトン『パイドロス』京都大学学術出版会.